



Life in Jomon

— 縄文時代の長崎 —



- 原の辻遺跡を中心とした長崎の弥生遺跡アーカイブ -

長崎県の古墳

Mounded Tombs of Ancient Nagasaki

- よみがえる副葬品 -



Life in Jomon

— 縄文時代の長崎 —

2021 2.26 FRI >> 6.27 SUN

長崎県埋蔵文化財センターオープン収蔵展示・展示資料

縄文時代とは



縄文時代は約1万5千年前から約3千年前まで、1万年以上にわたって続いた時代です。縄文時代には氷河期が終わり、気候が暖かくなったことで育つ植物なども変化しました。現在のように春夏秋冬がはっきりと訪れるようになった日本列島。この豊かな自然環境が縄文的ライフスタイルの要となりました。縄文時代より前の旧石器時代の人々は獲物を追って移動しながら生活していましたが、縄文時代には特定の場所に住む生活へと変わっていきました。

縄文人は土器や石器をうまく利用することで、自然を大幅に改変することなく特定の場所に長くとどまる「定住生活」を可能にしたのです。

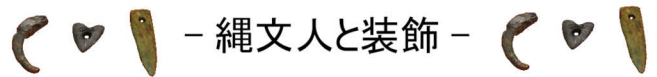
ORNAMENT



貝輪

宮下貝塚（五島市）

貝製のプレスレット。縄文時代の装身具の中でも出土例が多く、縄文人にとって身近な装身具だったと考えられます。



— 縄文人と装飾 —

縄文時代は基本的に、動物を狩り、植物を採って暮らしていました。こうした生活は、危険な生物や自然の脅威と常に隣あわせです。『すべてのものに魂が宿る』と考えていた縄文の人々は、魔除けや守護などの祈りを込めて、動物の角や牙、植物、綺麗な石といった自然の一部を『特別な力』として身に着けるなどしていたと考えられます。

それらの装身具は次第に『呪術的』な意味だけでなく、魅力的に見せるためなど様々な意味を持つようになります。

DESIGN

JOMON STYLE



縄文時代は6つの時期に区分され、その時期ごとに文様や形が異なります。九州では、前期に曾畑式土器、中期には阿高式土器、後期には北久根山式土器などといった土器がつけられました。

呪術的な道具？縄文のふしぎな出土品

『トトロ口石器』

石器の表面が磨かれ“トトロ口に溶けたように滑らか”なことからトトロ口石器と呼ばれています。石鏃に似た形ですが尖っておらず実用性がないことから、儀礼用の石器と考えられていますが、本当のところはよくわかっていません。



トトロ口石器

素材：石英 (quartz)

茶園遺跡（五島市）

曾畑式土器

（沈線＋列点文）



千里ヶ浜遺跡（平戸市）

阿高式土器

（凹線文）



伊木力遺跡（諫早市）

北久根山式土器

（装飾のある粘土帯）



白浜貝塚（五島市）

HOME

— 竪穴式住居 “ワンルーム” でミニマルな暮らし —

縄文時代の一般的な住まいは、半地下式で中央部に炉を作っていた竪穴式住居です。

家の中に現代でいう水回りに相当するような設備はなく、日々の生活に必要な水は近くの川に汲みに行くなどしていたと考えられます。必要最低限のものに囲まれて暮らしていたのではないのでしょうか。



竪穴住居 (イメージ)



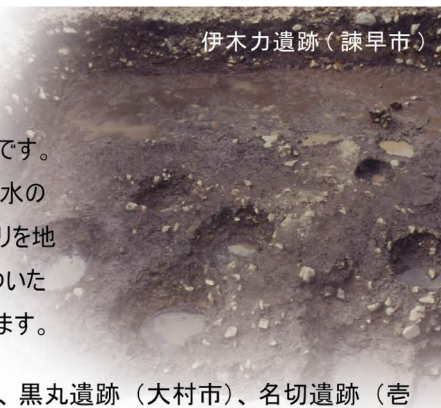
竪穴建物跡 / 竹松遺跡 (大村市)



ドングリ貯蔵穴 / 黒丸遺跡 (大村市)

ちよ ぞう けつ 貯蔵穴

主に食料を土の中に貯蔵するために掘った穴です。ドングリなどの堅い木の実を貯蔵していました。水の湧き出る地面に作られた貯蔵穴もあり、ドングリを地下水に浸すことによって発芽を抑えたり、実についた虫の除去、アク抜きなども兼ねていたと思われます。



伊木力遺跡 (諫早市)

貯蔵穴は1か所の遺跡に何十基もまとまって発見されることが多く、伊木力遺跡 (諫早市)、黒丸遺跡 (大村市)、名切遺跡 (壱岐市) などでドングリ貯蔵穴がまとめて見つかっています。

FOOD



縄文時代は肉食のイメージがあるかもしれませんが、魚介類、山菜、キノコ、様々な旬のものを食べていたようです。中でも、縄文人の主要食料だったと考えられるドングリなどの木の実、現代でも「スーパーフード」などと呼ばれるほど栄養価の高い食べ物で、縄文人の食をささえていたことがわかります。

出土した縄文時代のドングリ / 黒丸遺跡 (大村市)

KITCHEN WARE

縄文時代の遺跡からは、ドングリなどをすりつぶすために使用した石皿や、すり石などがたくさん見つかります。



宮下貝塚 (五島市)

貯蔵穴の底から出土したアワビ貝。貯蔵された木の実をすくう道具と考えられます。



中島遺跡 (五島市)

ドングリなど植物性食料を食べるためのアク抜きに必要な容器として、土器が生まれたともいわれています。縄文土器は煮炊きなどの調理や食器に使用されていたことがわかっています。



縄文晩期の土器 / 黒丸遺跡 (大村市)

EVERY DAY

縄文人にとって1番の仕事は“食料調達”でした。シカやイノシシなどの狩り、海や川での漁、木の実など植物性食料の採集を、季節に応じて計画的に行っていたことがわかっています。



落とし穴 / 竹松遺跡 (大村市)
動物を捕獲するための罠。中央に木杭を設置した跡が残っています。

生きることは食べること。命がけの食料調達は自然のサイクルに合わせた縄文的ライフスタイルをつくりました。



鹿の骨
堂崎遺跡 (五島市)





- 原の辻遺跡を中心とした長崎の弥生遺跡アーカイブ -

原の辻一帯が遺跡として注目されたのは、大正年間にまでさかのぼります。原の辻遺跡は明治 37(1904)年から 38(1905)年に小学校教員の松本友雄氏によって発見されました。その後、松本友雄氏、山口麻太郎氏、鴫田忠正氏ら島内在住の研究者により中央学会に報告され、研究者間で注目の遺跡となりました。著名な考古学者や歴史学者などが壱岐を訪れるようになり、戦後には、京都帝国大学を中心に各地の人材を集めた東亜考古学会が、5度にわたる考古学的学術調査を行っています。

ところが、東亜考古学会による調査以降、壱岐島での調査は休止状態となりました。

島という特性から大規模開発が行われる事もなく、また開発に伴う緊急発掘調査が実施されることも殆どありませんでしたが、「原の辻遺跡」がすでに研究者の間で有名だったことが、遺跡を見直す一大転機をもたらしました。

昭和 49(1974)年、島を訪れていた研究者の通報により、緊急調査が実施されることになるのです。この調査の結果を受け、改めて原の辻遺跡の範囲について確認する必要性が生じ、県の事業として翌年度から 3年間範囲確認調査を実施することになりました。

先人たちの並々ならぬ情熱と努力は、のちに国特別史跡となる「原の辻遺跡」の運命を大きく動かしたのです。



いしだおおぼる
石田大原墓域緊急調査 原の辻遺跡(壱岐市)

昭和49(1974)年、当時の石田町(現壱岐市石田町)教育委員会に原の辻遺跡周辺で甕棺破片と箱式石棺の石材が散乱しているとの通報があり、その情報は町から県文化課に急報されました。直ちに県文化課職員が現地に赴き確認した結果、壱岐独特の饅頭状に盛り上がった畑を水田にするため表面を削平した際に遺構の一部が破壊されたものでした。

この石田大原墓域の緊急発掘調査が実施されたのは、昭和46(1971)年、長崎県教育委員会に文化財課が発足し、行政による発掘調査の体制が整備され、その後文化課と名称変更になって間もなくのことでした。これは、それまで京都大学や九州大学などが中心となった東亜考古学会という学術研究機関によって行われていた発掘調査が、行政による調査に変わっていく最初期の調査でした。

石田大原墓域の時期は、原の辻遺跡が形成された頃にあたり、環濠集落に囲まれた集落域とその外に所在する墓域との関係を解明する重要な存在です。甕棺の中から副葬品として検出された中国式銅剣やトンボ玉は、原の辻遺跡と大陸との国際交流を示す貴重な出土品です。

国重要文化財

中国式銅剣

18号甕棺墓出土副葬品

弥生時代中期(約2200年前~2000年前)

刃部両側の内側に稜を持ついわゆる中国式銅剣の特徴です。造りの粗さから、仿製品(モデルをまねたもの)の可能性もあります。



勾玉



トンボ玉



管玉

(2号甕棺墓出土副葬品)



里田原遺跡 (平戸市)



平戸市田平町に所在する里田原遺跡は、土器や石器とともに、弥生時代の木でできた道具(木製品)が多く出土したことから、原の辻遺跡と並ぶ、長崎県でも有数の遺跡として知られています。

遺跡は土地の人々が里田原と呼ばれる水田地帯にあり、この水田地帯の北側の丘に立てば、北東方向玄界灘に壱岐島を遠望することが出来ます。里田原における土器片等の発見は個々にあったようですが、木製品等を包蔵する大遺跡として発見されたのは昭和47(1972)年の夏、国道沿いの一角における用地造成に際してで、この一角は第1次緊急発掘調査の対象となり、県史跡となりました。以来、昭和50(1975)年までに12回もの調査(試掘調査含む)が行われました。

里田原遺跡からは700点を越える木製品が出土しており、その種類も、農具・工具・生活用具・建築材・祭祀具など多岐にわたっています。

木製品の中には製作工程を示す『未製品』があり、磨製石斧や扁平片刃石斧などの工具も多く出土していることから、農具などを作る工人がいたことが想定されています。

特に鋏の製作は大きな木材から割り削り出すという、独自の製作技法があったことも確認されています。磨製石剣と把頭飾等は首長の存在や階級の分化を示すものとして注目されています。

その他の長崎県内弥生遺跡出土品(長崎県埋蔵文化財センター収蔵)をご紹介します!

しも 下ガヤノキ遺跡(対馬市)

この遺跡が知られるようになったきっかけは、福岡医科大学(後の九州大学医学部)教授であり考古学者でもあった中山平次郎氏が、昭和7(1932)年に考古学の調査で対馬を訪ねたことに始まります。中山氏によると、中山氏が対馬を訪れる4年前、堤防を築くために人夫(労働者)が土取りをしていたときに銅矛と銅戈を見つけ、当時の駐在所の巡査から中山氏へ、そして県立長崎図書館へと伝えられました(後に長崎県立美術館へ移管)。その後、昭和23(1948)年の東亜考古学会による調査や、昭和43(1968)年・昭和45(1970)年に長崎県が行った調査により遺跡の様相が明らかになっていきました。遺跡は三根川河口近くの小丘陵の先端にある弥生時代から古墳時代にかけての遺跡で、石棺墓(板石を箱状に組み合わせて棺にした墓)や特殊埋納遺構(青銅器や鉄器など貴重品を埋めた穴)など8箇所の遺構が確認されています。この遺跡は、遺跡の広がりや時期を考慮して「上ガヤノキ遺跡」と「下ガヤノキ遺跡」の2地区に分けられています。



銅戈

あれせとばる 阿連瀬戸原遺跡(対馬市)

昭和5(1930)年~6(1931)年にかけての開墾時に、銅矛2本がX字形に交差した状態で埋納されていたと伝えられています。残念ながら1本は現在所在不明で、残りの1本が展示品です。

銅矛が見つかった周辺からは箱式石棺が数基検出されており、箱式石棺墓群の中に埋納されていたことは注目されます。



銅矛



長崎県の古墳

Mounded Tombs of Ancient Nagasaki

— よみがえる副葬品 —

2021

10.29 Fri

2022

2.27 Sun

国史跡 ^{やたてやま} 矢立山古墳群 (対馬市)

大陸との関係が想像できる代表的な古墳

横穴式石室をそなえた3基からなる古墳群です。対馬島南西部厳原町小茂田の集落に注ぐ佐須川沿い標高約30mの丘陵上にあります。いずれも方墳で、三段の石積により墳丘がつくられていることがわかりました。石室は加工された切石が使われており、特に2号墳の埋葬施設は九州では他に例をみない「T字型横穴式石室」で、非常に珍しい形状をしています。

出土遺物には金銅装大刀、木棺に使用された銀座金具及び土器があり、7世紀前半から末まで、追葬されたと考えられます。

国境の島にある7世紀代の終末期古墳として、大陸との関係が想像できる代表的な遺跡です。

当時、対馬が重要な場所であったことがうかがえます。



国史跡 ^{まがりざき} 曲崎古墳群 (長崎市)

丸い石を積み上げた積石塚の古墳群

橋湾にある牧島の東側の礫丘上につくられた古墳時代後期の積石塚の古墳群です。

円礫を積み上げた101基の積石塚が確認されています。出土遺物には、ガラス製小玉17点、碧玉製管玉1点のほか、土師器や須恵器の高杯、甕、壺などがあります。石室の構造には竪穴系横口式石室の特徴をもつものがあり、北部九州に分布する同種の古墳群と類似することから、この地域が北部九州の文化圏に属していたことが考えられます。礫丘上にあり、集落と墓域が明確に区別されていることは、古墳時代後期の群集墳のあり方を理解するうえでも貴重な遺跡といえます。

全国に数少ない積石塚の代表例として、昭和53年、国史跡に指定されました。



県史跡 ^{そのぎ} 彼杵の古墳 (東彼杵郡)

交通の要地に県下最大級の前方後円墳

全長58.8mで県内最大級の、長崎県を代表する前方後円墳です。西に大村湾を見渡せる標高2m程の海沿いの低地部にあり、当時、大村湾周辺地域で海陸交通の要所であった「彼杵」の地に築かれています。前方部が低い、古式の墳丘形態で、長い年月の間に周辺が削られ、瓢(ひょうたん)の形をしているところから「ひさご塚」と呼ばれてきました。調査では後円部上に2基の石室が確認され、副葬品には銅鏡1面、ガラス製小玉(300点ほど)、鉄鏃、鉄剣鉄斧、刀子などの鉄製品が出土しました。2基の石室は大村湾岸で弥生時代から見られる箱式石棺を大型化したものと、竪穴式系横口石室で、弥生時代からの系譜と北部九州とのつながりをもつ石室が融合しているのが特徴です。

副葬品から5世紀前半頃の築造と推測され、昭和25年に県史跡指定されました。現在は墳丘が復元され、隣接する東彼杵町歴史民俗資料館では副葬品などが展示されています。



県史跡 ^{かさまつてんじんしゃ} 笠松天神社古墳 (平戸市)

本土部最西端の前方後円墳

平戸市田平町に所在する全長約34m、後円部直径約22mの前方後円墳です。弥生時代の水田遺跡などが確認されている里田原遺跡南方の丘陵の上に築かれています。発掘調査により、後円部中央に石室の痕跡を確認しましたが、既に盗掘を受けており、出土遺物は土器片のみ数十片でした。

近畿地方の纏向型前方後円墳という初期古墳の形に近く、自然の地形を利用して墳丘を造ったいわゆる「丘尾切断」型古墳です。4世紀中頃までに築造されたと考えられ、九州でも最古グループに属する前方後円墳で大変貴重です。

本州最西端のこの地で実力を培ってきたと思われる豪族が、中央政権と結ばれたことの表れと推測されます。



国史跡 かけぎ 掛木古墳 (壱岐市 勝本町)

標高100mほどの丘陵に立地する円墳で、周辺一帯の丘陵は県内で最も古墳が集中して分布する地域です。

この古墳は、掛木家の北風を避けるための背戸山でしたが、現在は、墳丘・石室ともに整備され観光地としても知られています。

古墳の規模は、現状で南北22.5m、東西18m、高さ7m程度で壱岐島内の円墳としては中型になりますが、当時は直径30m程度の円墳だったと想定されています。石室は、前室・中室・玄室の3室構造両袖式の横穴式石室で、全長13.6mの長さです。

玄室の奥の壁に接して設置された石棺は石材をくりぬいてつくられたくりぬきしきいえがたせつがん刳抜式家形石棺で、大王や大豪族といった最高ランクの埋葬に用いられたと考えられている石棺です。同じ家型石棺でも、石材を組み合わせつくられたものはややランクが下がるともいわれます。

長崎県で唯一、刳抜式家形石棺を持つ古墳です。



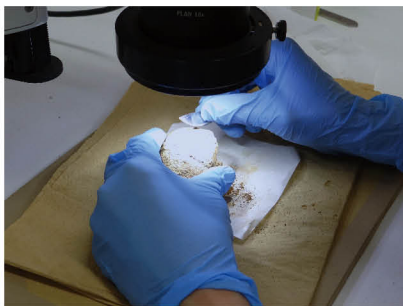
刳抜式家型石棺

- 保存処理でよみがえる副葬品 -

よみがえる金銅製品

ひやくたがしら ▶ 百田頭古墳群(壱岐市)

金銅製品とは銅に鍍金（金メッキ）されたものです。古代から金は希少だったため、極力少量の金で黄金色の道具を作っていました。しかし長い間使用されなかった金銅製品は銅や鉄のサビで表面がおおわれて、土の塊のような状態で出土します。そこで、顕微鏡で拡大観察しながら医療用のメスを使って表面のサビを削り落としていきます。サビは硬く、しかし鍍金は薄く無くなりやすいので、とても慎重に根気のいる作業を続けることで、当時の黄金色がよみがえりました！



医療用のメスで表面のサビを削り落とす



AFTER 保存処理後

よみがえる馬具

ひやくたがしら ▶ 百田頭古墳群(壱岐市)

古墳を発掘すると、馬を操る際に装着する道具『馬具』が多く出土します。しかし、長い間使用されなかった鉄でできた馬具はサビてしまい、またその多くはバラバラに壊れた状態で出土します。そこで、まず透過X線撮影（レントゲン写真）で元の形状を確認し、グラインダーやエアブラシを使って表面のサビを削り落としていきます。それらを接着剤で接合し、最後に特殊な樹脂でコーティングすることで、当時の形状をよみがえらせることができました！



グラインダーでサビ取り



AFTER 保存処理後



長崎県埋蔵文化財センター

〒811-5322

長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触 515 番地 1

TEL: 0920-45-4080

<http://www.nagasaki-maibun.jp/index.html>

2022年3月発行

Facebookでも最新情報を発信しています。